



石神井中だより

練馬区立石神井中学校

校長 山田 美鈴

令和7年10月8日

第6号

発達障害の理解



校長 山田 美鈴

発達障害とは、広汎性発達障害、学習障害、注意欠陥多動性障害など、脳機能の発達に関する障害のことを指します。この場合、他者とのコミュニケーションなどを苦手とする場合が多く、集団生活の中で悩みを抱えるケースが考えられます。逆に他者より優れた才能を発揮することで、社会の中で優秀な成績を収めたり、広く社会に役立つ仕事に就く人も多く存在しています。ただ周囲から見て得手不得手のアンバランスな様子を理解されにくい特徴がある場合も見受けられます。

発達障害の中で最も多いのが「注意欠陥・多動症（ADHD）」、次に多いのが自閉スペクトラム症（ASD）で、この2つが主要とされています。最近の調査では、およそ8%の割合でADHD、ASD、学習障害（LD）のいずれかの特徴がある生徒がいると推定されています。かつてはこういった発達障害への認知度が低く、なかなか理解されることが困難でしたが、少しずつではあっても診断基準など変更を重ね、従来見過ごされてきた特性をも診断されるようになってきました。

発達障害の理解は重要ですが、周囲の大人があまり過敏に反応しすぎてしまい、子どもの自己肯定感を損なう危険性もはらんでいますので、あくまでも特性をどのように生かしていけるか？といった観点で専門機関の指導を受けつつ、子どもの幸せのために有効な配慮は何か、どのような関りをしていけばよいのか、を家庭や学校でともに考えていく必要があります。

発達障害の子どもが人間関係で悩む理由を例に挙げてみます。

まず非言語コミュニケーションが苦手なため、相手の言葉をそのまま受け止めがちです。例えば大人が子どもを急かそうと「一体何時だと思っているの？」と叱責しても、言語そのままを受け止め「今は〇時だよ！」と悪びれず答えるなどが一例です。また世の中の暗黙のルールを理解できず自分なりのルールや順番にこだわりをもち、周囲から面倒くさがられるケースもあります。

相手の気持ちを理解することが苦手なので「もう少し」とか「たくさん」といったような曖昧な指示だと理解できず、自分の価値基準で行動してしまい、他者とトラブルになるケースもあります。また他者が軽い気持ちで言った「また会おうね！」という言葉を実に受けて、具体的な予定を決めてくれるまで何度もつきまとうってしまうといったケースなどもあります。

こういった障害に対する理解が進んでいないために、学校のような集団生活に自信がもてなくなり、登校しぶりになってしまうことも十分考えられます。

「誰一人取り残さない教育」を進めていくためには、生徒一人一人に対する理解が必要です。本校には学びの多様化推進教員（不登校対応巡回教員）が今年度より配置されました。この教員は通常の学級、情緒障害児学級、特別支援学級での教職経験があり、不登校対応のみならず障害理解に対する研修も積み上げてきております。この教員を中心に本校では「ゆ～る～む会」を企画しました。登校しぶりなどに悩む保護者同士が互いに語り合い支え合えるきっかけづくりになればと思います。10月11日（土）14時～本校図書室 です。どなたでもお気軽にご参加ください。なおこのご連絡は先日 sigfy にてご案内しております。ご確認ください。